

研究計画書

ゼミ名	市野ゼミⅢ	チーム名	ヒガシマル
タイトル	飲酒年齢を 18 歳以下に引き下げるべきか		
テーマ群	c) 公共経済		
メンバー	川口 綾		
研究計画内容	<p>大学生になり、追いコン・打ち上げ・忘年会…お酒の席に呼ばれる機会はぐんと増えた。飲みニケーションに代表されるように、お酒の力を借りて行われるコミュニケーションは相手の思わぬ一面を知ることが出来る。それと共に、見知らぬ人との距離を縮め、新たな人間関係の形成にも一役買うことは言うまでもない。しかし、大学は特殊な空間でそうしたお酒の場に参加することが出来ない 18・19 歳も座席しており、新歓コンパなどそうした未成年者を主役とした飲み会の席も多くある。</p> <p>「来年夏の参院選挙より、選挙権年齢が現在の 20 歳から 18 歳に引き下げられる」といったニュースは耳に新しい。それに合わせて、成人年齢を 18 歳に引き下げ、飲酒・喫煙に関しても 18 歳から認めるべきだとする内容の提言もあり、多くの賛否両論を生んだ。</p> <p>この研究では、「18 歳から飲酒・喫煙を認める」提言をめぐる一連の論争を踏まえ、焦点を飲酒のみに絞ったうえで、年齢を 18 歳以上からに引き下げるべきだと主張する。その主張にあたっては、次の 2 つを主要な論点とする。</p> <p>① なぜ飲酒は 20 歳になってからなのか。18.19 歳と 20 歳の違いはどこにあるのか。日本の現状を知り、飲酒禁止にまつわる歴史をひもとくと共に、線引きが 20 歳とされた経緯を、成年年齢を例にまとめる。</p> <p>② 飲酒年齢を 18 歳に引き下げることによって被ることとなるコストを、「本人が負担するコスト」と「本人以外が負担するコスト」の二つに分け、18 歳から飲酒を認めることへの反対意見に対し考えうる限り説明を行う。</p> <p>以上 2 点を飲酒にまつわる文献や統計をもとに研究を進め、最終的には諸外国の現状を参考に、今の日本の現状と法との間にミスマッチが無いか明らかにする。さらに、18 歳・19 歳が飲酒を行うにあたり、より良い環境とそれに対する新たな制度について検討する。</p>		